

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：学校教育センター

資格：助教（臨床）

氏名：古波藏 香

| | |
|---------|----------------------------|
| 研究分野 | 研究内容のキーワード |
| 教育学 | 平和教育、災厄の記憶の継承、アジアの歴史教科書対話 |
| 学位 | 最終学歴 |
| 修士（教育学） | 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|------------------------------|-------------|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| | | |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| 1. 『子どもと教育の未来を考えるⅡ』（共著） | 2017年10月15日 | 教員志望の大学生に向けた教育学・教育原理の教科書。教員志望の学生に、家庭・学校・社会における今後の教育のあり様について自ら考える手がかりを提供することが本書の目的である。 |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| | | |
| 4 その他 | | |
| | | |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|------------------------------|--------------|--|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 資格、免許 | | |
| 1. 教員免許 | 2009年3月25日取得 | 小学校教諭専修免許状（2013年3月取得） 中学校教諭第一種免許状（国語） 高等学校教諭第一種免許状（国語） |
| 2 特許等 | | |
| | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| | | |
| 4 その他 | | |
| | | |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---------------------------------|---------|-------------|-------------------|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| 1. アクティベート教育学⑨道徳教育の理論と実践 | 共 | 2020年4月30日 | ミネルヴァ書房 | 教員志望の大学生に向けた道徳教育の教科書。教員を志望する学生が道徳の意義や原理、また教育活動としての道徳教育の指導法等について具体的に学ぶことを目的とする。 (担当章) ①pp. 137-147. 「第8章読み物資料の役割—平和教育における物語資料の活用から—」を執筆した。 (監修者：汐見稔幸、奈須正裕、編著者：上地完治、分担執筆：毛内嘉威、小林万里子、岩立京子、坂本哲彦、櫻井宏尚、百崎剛寿、堺正之、古波藏香、早川裕隆、北川沙織、服部敬一、眞榮城善之介、上地豪、天願直光、藤井佳世、岡部美香、渡邊満) |
| 2. 『子どもと教育の未来を考えるⅡ』 | 共 | 2017年10月25日 | 北樹出版 | 教員志望の大学生に向けた教育学・教育原理の教科書。教員志望の学生に、家庭・学校・社会における今後の教育のあり様について自ら考える手がかりを提供することが本書の目的である。 (担当部分概要) ①pp. 200-216. 「第二部 第5章—共に歴史を語るとは—」および、②pp. 217-226. 「第二部 補論—出来事を物語ること、出来事の物語りを聴くこと」を執筆した。 (編著者：岡部美香、分担執筆：佐々木暢子、高田俊輔、森岡次郎、上林梓、國崎大恩、近藤稔太郎、知念渉、馬上美知、藤高和輝、高橋舞、古波藏香) |
| 2 学位論文 | | | | |
| 1. 「平和教育に関する批判的考察—同一化の問題をめぐって—」 | 単 | 2013年3月 | 琉球大学大学院 | 従来への平和教育に関する先行研究が暗黙裡に肯定してきた共感という態度に主眼を置き、共感を若い世 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|--|---------|-----------|---|---|
| 2 学位論文 | | | | |
| | | | | 代に求めることが持つ問題性を批判的に検討した。すなわち、共感を強く求めるあまり、戦争記憶の継承が戦争体験者や教師による一方向的なものとして停滞してしまう危険性を内包しているのではないかという仮説のもとで、共感という態度について批判的考察を行った。 |
| 3 学術論文 | | | | |
| 1. 戦争体験者への共感が持つ教育実践上の意味と課題 | 単 | 2017年3月 | 大阪大学『教育学年報』第22号 (pp. 15-25) | 本論では、戦後日本の教育が評価してきた、他者の心情を理解するという共感的態度が持つ教育実践上の意義と問題性を取り上げた。事例として挙げたのは戦争記憶の継承である。継承に際して見られる、体験者への配慮に基づく共感的態度が、実は体験者を規定し、追い込む危険性があることを指摘した。また、共感という教育方法は戦争忌避の感情を育むという効果がある一方で、戦争の構造的な理解が困難になってしまう。この指摘は、共感を無批判に受容してきた戦後日本の平和教育の在り方に対し再考を促すものであり、道徳教育の課題の一つでもある。 |
| 2. 「平和教育に関する批判的考察―被害者性に共感することの問題性―」(査読付) | 単 | 2013年3月 | 日本道徳教育方法学会『道徳教育方法研究』第18号 (pp. 21-30) | 本論では、戦争の記憶の継承に際し、戦後日本の教育が戦争の被害体験者への共感という教育方法を採用してきたことによって生じた問題を指摘した。その問題とは、個人の経験に共感を寄せることに終始してしまっていること、そして、そのために、戦争の構造理解が看過されてきたということである。こうした、問題の解決策を対象者の心情に求めることや、「被害―加害」という二項対立図式で事象を捉える構造への批判は、今日的な教育課題を原理的に検討するための枠組みを提供するものである。 |
| 3. 「平和教育における加害者性をめぐる問題」 | 単 | 2013年3月 | 中国四国教育学会『教育学研究紀要』第58巻1号 (pp. 13-18) | 本論では、日本が戦時中に行った加害の歴史に焦点化した平和教育の方法論について考察を試みた。この考察から明らかとなったのは、「被害―加害」という二項対立図式のみで物事を判断することの危うさと、問題解決の方途が傷ついた他者への「同一化」という心情理解に終始してしまい、戦争がなぜ起こったのかという構造理解にまで向けられていないという問題性である。これらの考察は、教育原理における重要な課題を検討するための基礎的な概念と図式を提供するものである。 |
| その他 | | | | |
| 1. 学会ゲストスピーカー | | | | |
| | | | | |
| 2. 学会発表 | | | | |
| 1. 教育研究における東アジアのポジショナリティ | 共 | 2018年9月 | 教育思想史学会第28回大会 (於：大阪大学) | 全体テーマ「教育研究における東アジアのポジショナリティ」のもと、申請者は「日本・中国・韓国における歴史教科書対話の意義と課題」というテーマで日本・中国・韓国における歴史教科書対話の意義と課題について考察を行った。三国の国際歴史教科書対話の課題として、三国を中心としたナショナルな枠組みを保持していること、三国以外の周縁の歴史を看過してしまうことを指摘した。こうした課題を受けて、周縁に位置づけられている沖縄の歴史をひとつの事例として、歴史を複層的に捉える視点について検証を試みた。本発表は歴史教科書の記述を原理的に再考する試みであると同時に、道徳教育の課題のひとつでもある、周縁に位置づけられる様々なマイノリティの歴史の捉え直す契機を提供するものである。 |
| 2. The potentiality of “History Textbook Dialogue” : How can be Asian Histories discussed among Asian peoples? | 単 | 2017年7月 | Asian Link of Philosophy of Education 2017 (於：広島大学) | 本発表では、日中韓歴史共通教材作成において見られる、東アジアが共に歴史を語るという試みについて考察を行った。この考察は、それぞれの国の教育を原理的・歴史的に考察し、問い直すという試みでもある。また、グローバル社会の構築が進む今日、東アジアにおいて共有し得る歴史認識のあり様を探ることは、これからの教育を原理的に考えるうえでも重要な教育課題の1つであることを指摘した。 |
| 3. 戦中期における長田新の平和教育思想 ―『新知育論』の教育思想を手がかりに― | 単 | 2015年8月 | 日本教育学会第74回大会 (於：お茶の水女子大学) | 戦後教育学が持つ構造を戦前の教育学や教育思想との関連、あるいは連続性という観点から問い直すことは、教育の歴史において近代をどう捉えるかを考えるのに必要な課題である。こうした課題は教育原理における重要なテーマの一つでもある。本発表では、戦後教育学の構築に寄与した長田新が戦前に著した教育思想を手がかりに、長田の近代批判は、近代批判として十分であったのか、特にファシズム批判として十分であったのかを考察した。 |
| 4. A study on the thought of peace | 単 | 2015年1月 | Asian Link of Philoso | 本発表では、戦後日本の教育学の構築に寄与した長 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-----------|---|--|
| 2. 学会発表 | | | | |
| e education in Japan after World War II: Focusing on Arata Otsuda's thoughts in the early post-war period | | | phy of Education Winter Seminar 2015 (於：嘉義大学【台湾】) | 田新の教育思想を考察し、長田の教育思想の構造が戦前との連続性を保ちつつ成り立っていることを明らかにした。さらに、中国、韓国、台湾の研究者らと意見交流ができる発表の場であったため、長田の教育実践や教育思想の一つの手がかりとして、戦後日本の教育理念の形成過程や変遷を、東アジアの観点から自覚的に捉え直すことの必要性を指摘することも試みた。こうした試みは教育の歴史や思想を扱う教育原理にとっても重要な視点をもたらすものである。 |
| 5. 戦後日本における平和教育の形成過程—長田新の平和教育思想を中心として— | 単 | 2014年11月 | 関西教育学会第66回大会 (於：滋賀大学) | 本発表は、戦後日本の教育の変遷を、平和教育に焦点を当てながら、思想史的な観点から考察した論考である。考察にあたっては、戦後教育学の構築に寄与した長田新の教育実践と教育思想に焦点を当てた。この考察から明らかとなったのは、戦後初期の長田の教育実践を支えていた教育思想が構造的に戦前の彼の思想と地平を共有していたことである。このことを通して、教育原理のテーマの一つである戦後の教育の歴史は、戦前の歴史との連関において再考する必要があることを指摘した。 |
| 6. 平和教育に関する批判的考察—被害者性に共感することの問題性— | 単 | 2012年6月 | 日本道徳教育方法学会第18回大会 (於：國學院大学) | 本発表は、日本の戦争の記憶の継承をめぐる問題について論じたものである。本発表では、戦争の記憶継承に際し、戦後日本の教育が戦争の被害体験者への共感という教育方法を採用してきた事実を考察した。考察を通して明らかとなったのは、戦争体験者の体験や心情を理解できると安易に思考することにより、体験者の他者性を阻害してしまう危険性があるということだ。こうした問題を検討することは、道徳教育の今日的な教育課題を検討するための枠組みを提供するものである。本発表の内容に加筆修正を加えたのが【学術論文2】の業績である。 |
| 7. 平和教育における「加害者性」をめぐる問題 | 単 | 2012年11月 | 中国四国教育学会第64回大会 (於：広島大学) | 本発表では、日本が戦時中に行った加害の歴史に焦点化した平和教育の教育方法に関する考察を試みた。この考察から明らかとなったのは、「被害—加害」という二項対立図式のみで物事を判断することの危うさと、問題解決の方途が傷ついた他者への「同一化」という心情理解に終始してしまい、問題がなぜ起こったのかという構造理解にまで向けられていないことの問題性である。これらの考察は、教育原理における重要な今日的課題を検討するための基礎的な概念と図式を提供するものである。本発表の内容に加筆修正を加えたのが【学術論文3】の業績である。 |
| 3. 総説 | | | | |
| 4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績 | | | | |
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 6. 研究費の取得状況 | | | | |

学会及び社会における活動等

| 年月日 | 事項 |
|----------------|------------|
| 1. 2017年12月～現在 | 教育哲学会 |
| 2. 2015年11月～現在 | 教育思想史学会 |
| 3. 2014年9月～現在 | 関西教育学会 |
| 4. 2013年5月～現在 | 日本教育学会 |
| 5. 2011年6月～現在 | 日本道徳教育方法学会 |